

表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリア

—フレーゲ的表象主義にもとづく考察

松崎俊之(石巻専修大学)

津上英輔はその著『あじわいの構造』(2010)において、味と対比しながら「あじわり」についてさまざまな角度から論じるのであるが、本発表では、この津上の議論をひとつの導きとしながらも、「味」と「あじわり」のもつクオリアとしての側面にとくに注目し、前者を知覚的クオリア(すなわち知覚において問題となるクオリア)を指すメタファーとして、また後者を美的クオリア(すなわち美的経験において問題となるクオリア)を指すメタファーとして捉え返すことで、両クオリアの関係について考察をおこなう。

クオリアをめぐる論争点のひとつにクオリアは表象的特性か否かという点が挙げられるが、本発表では、少なくとも知覚的クオリアと美的クオリアに関しては、両者を表象的特性と見なすクオリア表象主義の立場を採る。今日クオリア表象主義の主流をなすのは「ラッセル的表象主義」であると言えるが、この立場によれば、知覚的クオリアの表象内容は対象のもつ知覚的特性であり、美的クオリアの表象内容は対象のもつ美的特性ということになる。ラッセル的表象主義は、各クオリアが表象する特性を対象に直接的に帰属するという点で一定の長所をもつが、その一方で同一のクオリア経験が対象に異なった特性を帰属することになりかねないという深刻な問題を蔵する。

ラッセル的クオリア表象主義が必然的に蔵するこうした問題を回避するためにD. チャーマーズがあらたに提唱するのが「フレーゲ的表象主義」であると言えるが、本発表では、このフレーゲ的表象主義にもとづき表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリアについて考察をおこない、知覚的クオリアの表象内容が、対象に帰属される知覚的特性を規定するための条件をなす、知覚的クオリアによる知覚的特性の呈示様態としての「通常諸条件のもとで大抵の場合当該の知覚的クオリア経験を引き起こす特性」であるのに対し、美的クオリアの表象内容は、対象に帰属される美的特性を規定するための条件をなす、美的クオリアによる美的特性の呈示様態としての「経験主体が当該知覚的クオリアをどのように感受しているか、すなわち、経験主体と知覚的クオリアとの間に成立するある特定の関係様態」であることを明らかとする。

フレーゲ的表象主義によるならば、知覚的特性と美的特性のみならず、知覚的クオリアと美的クオリアをも射程に収めた包括的な美的経験理論の構築に向けて途が拓かれることになるが、本発表では、こうした理論的可能性を秘めた、両クオリアに関するフレーゲ的表象主義的理解が潜在的に含意するところのものを顕在化することを狙って、その著『赤を見る』(2006)における「われ感ずる故にわれ在り(sentio ergo sum)」といった趣旨のN. ハンプリーの主張を取り上げ、これをそれぞれのクオリア経験が開示する経験主体と世界との関係様態という側面から解明する試みを示す。